

「議会開設運動」の始まり(3)

平野 貞夫
元参議院議員

「立志社」が先導する国会開設運動

1874(明治7)年1月17日に、板垣退助らが政府の左院に提出した「民撰議院設立建白書」は、全文が「日新真事誌」という新聞に発表され、国民に知られるようになり、議会開設派と時期尚早派の大論争が起ります。建白書提出の3日前、土佐出身の武市熊吉ら9人が「赤坂喰違の変」という事件を起こします。

これは右大臣岩倉具視を襲撃した事件です。事件は夜に起り、岩倉は濠に落ちて水草をかぶって暗がりにまぎれ無事でした。武市ら9人は捕まり斬首され、この事件が建白書の提出の直前だったことから、政府転

覆の活動を疑われて建白書は却下され、厳しい弾圧が始まります。

板垣らは議会開設運動の方法を検討し、まず運動の基本となる「議会政治の基本知識や理論」を学び、人々に広げる運動から始めることとし、故郷の高知に「立志社」を創立します。立志社は建白書を提出した同じ年の3カ月後の4月10日に活動を始めます。そこでは「四民平等・天賦人權」の知識を人々に広げようとしませんが、参加者が少なく最初は生活に困った士族の救済に取り組みます。

当時の政府が専制的政治を行うようになり、立志社は「立志学舎」を併設して、青年子弟が新知識を学ぶようになる、運動は広がっていきます。西郷隆盛や

板垣退助が下野した政府は、大久保利通と木戸孝允を中心とする政治が続きます。木戸が台湾問題で大久保と対立し下野すると、大久保の専制姿勢が目立つようになり孤立していきます。

この事態に立志社は、1875(明治8)年2月18日、大阪で全国同志の結集大会を呼びかけ、本部を東京に置く「愛国社」を設立することになり、全国的に政治活動を行うことになりました。この事態に先立つ2月11日、大久保・木戸・板垣・伊藤博文らが大阪に集まり、「大阪会議」を開くこととなります。ここで政治改革が話し合わせ、元老院の設置・地方官会議の開設、内閣と各省の分離などの合意ができます。これで木戸と板垣が政府に戻り参議に復職します。

4月14日には、木戸・大久保・板垣・伊藤の「政体取調の上奏」を受けた明治天皇は、「明治8年4月14日の大詔」を発します。その主旨は「左右両院を廢して元老院、大審院を置き、地方官会議を開設、漸次に立憲政体を確立する」というものです。

この明治政府の改革にも拘わらず、内閣の実権は大久保のほしいままが続ぎ、板垣と木戸の政策の対立など閣内対立が激しくなります。これを受けて新聞は元

老院や地方官会議の効果があらぬことに失望して政府攻撃を強めました。

これに対して政府は7月に「讒誘律」と「新聞条例」を制定、9月には「出版条例」を改定して言論弾圧に踏み切りました。この時期に投獄された言論人は、末広重恭・植木枝盛ら数十人と言われます。

10月の日本と朝鮮の紛争「江華島事件」を機に、板垣と左大臣・島津久光は、改革が進まないことや太政大臣・三条実美の優柔不断に抗議して辞職。翌年3月には木戸も閣内対立のため参議を辞職し、権力は再び大久保が独占することになります。

この時期、1876(明治9)年から翌年を中心に、日本各地で明治政府への反乱や一揆が起こっています。士族の不満や農民の地租に対する不満が原因です。神風連の乱、秋月の乱、萩の乱などが士族の反乱で、茨城県の真壁や三重県内の各地での農民一揆がそれです。

明治政府がもつとも恐れていたのは、1877(明治10)年2月15日、西郷隆盛が「政府に尋問の筋あり」とし、1万5千人の兵を率いて鹿児島で起こした「西南戦争」でした。このとき、多くの人々がもつと

も関心を寄せたのは、高知の立志社の動きでした。この時、ある風説が土佐で流れました。「政府は土佐で兵を募って西郷軍を討伐させ、この命に従わなければ政府に敵対するものとみなして、土佐を征討する」というものです。

立志社では社員の中から「西郷軍に呼応して拳兵すべきだ」と強硬な意見が続出します。これに対して「いま立志社が取るべき道は、国会開設にあり」として、天皇への建白書提出と決めます。その要旨は「国家の相次ぐ混乱の原因を、天皇が任命した二、三の大員が専制政治を行い、公議世論に耳を傾けないからだ」と断じ、失政八項を挙げて政府を厳しく批判しています。

さらに、専制政治の弊害を除くために「憲法制定・国会開設・租税の軽減・地方自治の確立・不平等条約改正・特定政商への保護政策撤廃等」です。これが全国的な自由民権運動の基本要求でした。そして立志社が土族的限界を抜け出し、国民大衆とともに国会開設・自由民権運動を展開する出発点となります。

「西南戦争」と「立志社」に関わる歴史の捏造

の権威・遠山茂樹先生のゼミで『自由党史』を学ぶことになりました。そこで子供の頃に信じていた先祖が西郷さんを救援に行った物語に疑問を持つようになったのです。

『自由党史』には、林有造らの行動を「高知の大獄」と表示していますが、「立憲体制創立の目的を以て、革命を兵馬の間に断行せんとせしは……」と記した部分がありました。これは「市民革命」と性格づけられると思います。そこで遠山先生に「国会開設・自由民権運動には武力による市民革命を目指す勢力もあつたのではないか」と質問したことがあります。

遠山先生は「衝動的な活動で組織的な市民革命といえるものではない」と答えてくれました。私は納得できませんでした。当時、日本共産党が「党内外に残っていた武力革命指向を否定して議会主義を確立する」時期でした。その関係かと思っていました。

その後私は、吉田茂・林譲治両先生の縁で政治の現実を学ぶため、衆院事務局に勤めることになりました。60年安保時代でした。林先生から次の思い出話を聞く機会がありました。

終戦直後の第一次吉田内閣で書記官長（現在の内閣

）「土佐から西郷軍に呼応して拳兵すべし」との声が立志社の中から出ましたが、それだけではなく、銃などを整えて宿毛湾から舟で出港する集団が、警察に逮捕されたとの話が残っています。私の故郷は、現在の行政名は「土佐清水市」ですが、明治初期は「高知県幡多郡三崎村」でした。幡多地方といえば、四万十川・足摺岬・宿毛湾の景勝地で、僻地としても有名なところでした。

さらに過激な自由民権運動の地としても知られています。子供の頃、親族の村の長老から「先祖の一人が西郷さんを助けに行くと、宿毛湾で出港するとき警察に捕まり、松山の監獄に入れられたことがある」との話が聞かされました。話の流れで「幹部の林有造や竹内綱は東京に連行され、監獄に入れられた」との話です。林さんの息子が林譲治衆議議長で、竹内さんの息子が吉田茂首相です。

この地域では立志社の動きが、西郷隆盛という維新の英雄の救援という物語で始まり、その息子たちが昭和の戦後、日本の復興で活躍したという歴史話になっています。私が上京し、1958（昭和33）年に法政大学大学院政治学修士コースに入学して、明治政治史

官房長官）の頃、食料危機で共産党の徳田球一書記長が「吉田首相に会わせろ」と面会に来て、吉田首相の代理で会った時の話です。

「吉田首相の父と林書記官長の父は、国会を市民革命で行うとした我々の先駆者であつた。その息子たちは父親の精神を継承しているはずだ。命懸けで人民が餓死しないよう占領軍と話し合ってくれ」との徳田書記長の要請でした。

それを吉田首相に伝えたところ、しばらく目を伏せていて、次のように語ったそうです。

「自分と父親は複雑な関係であつた。父親が営められたことは初めてだ。徳田君がいうように国会開設・自由民権運動の中に、市民革命を志した人たちがいたが、その後の歴史の中で、そう位置付けることは保守側にも革新側にもいなかった」と。

この話を林先生から聞いた私は「これだ!!」と思いました。日本人は自分達の歴史の事実で都合の悪い部分を認めない傾向があると。国会開設運動から150年を経た今日、議会制民主主義が危殆に瀕しているこの機会に、日本議会史の真実を究明していくつもりです。